



「戦後八十年 羽村の寺の昔とこれから」

今年(戦後八十年、昭和百年)でいろいろなことが、ふりかえられています。そこで、羽村の寺のことを書きます。

私事からですが、宗禅寺の先住職俊諦和尚は昭和二一年に住職となりました。その頃、一峰院は桃源和尚、禅林寺は守山和尚、禅福寺は碩巖和尚さんでした。戦後の貧しい時代を和尚さん方は、役場に勤め、教員をされ、パートに出たりと、それぞれお寺や家族を守るために、大奮闘をされていました。檀家も少なく寺の収入だけでは維持できなかったからです。日本国中の方々の努力によって、経済も安定し、今では、お寺の収入で寺の維持が可能になりました。ありがたい事です。

その後、寺は正純禅林和尚、正俊宗禅和尚、岱山一峰和尚、泰文禅福和尚に引き継がれ、先代の継承から発展充実をむかえることにな

ります。

特筆すべきことは、昭和五三年にこの四人の和尚によって羽村臨済会が発足したことです。ほぼ五〇年になります。

羽村の和尚さん達が、ひとつになつて活動をしていくというものでした。

最初にしたことは、各寺院持ちまわりの坐禅会でした。禅林寺さんから一峰院、禅福寺、宗禅寺へと、一年交代でした。おかげで羽村の多くの方が坐禅をしてくれました。和尚達は、禅宗の特徴のようになっている托鉢も始めました。歳末助け合い托鉢、難民救済托鉢と、年二回、この托鉢には近隣の和尚さんにも応援に駆けつけてくれました。坐禅会を源にして年一回の「禅の旅研修会」も那須雲巖寺を始め年一回、多くの所に行き、交流を深めました。一峰院の岱山和尚の下では和尚

の自主勉強会もしました。その中でも特筆すべきことは、禅福寺さんの坐禅会の中から立ち上がった「羽村燈籠流し」でした。各寺院の檀家さんたちが、それぞれ役割を分担され、見事な展開をしてきました。現在は各寺院でそれぞれの活動に終息しています。残っているのは昭和五六年から発行のこの

「慧光」誌のみとなりました。

お寺の檀家さんも増加し、それぞれのお寺の和尚さんは外へお勤めする必要もなくなり、各目、忙しくなつた寺を維持することになりました

先年、正純禅林和尚さまが亡くなり、正俊宗禅和尚、泰文禅福和尚も高齢となり、又岱山一峰和尚は御自身の研究生活のため、寺を離れました。

今羽村の寺は、啓純禅林和尚を筆頭に、義紹一峰和尚、和正宗禅和尚、尚玄禅福和尚へと移り変わりつつあります。

代が確実に代わっていくと共に、時代も変わりつつあります。少子高齢化のもと、墓じまいや直葬、家の後継者のこと、新しい課題がふえています。若い方々、檀信徒の方々と共に、寺や地域の未来のために大いに奮闘をしていただきたいと期待しています。

(宗禅 正俊)